

ひとまたぎほどの小さな堤が、ゆるやかな線を描いて、私の住んでゐる舎の周囲をかこんでゐる。堤の上には、一間程の隔りを見せて、つゝじと玉ひばが交互に植ゑてある。堤の柴は青く芽ぶき、つゝじはいま花ざかりである。この堤は、つひ先頃、何も無い素枯れた庭の淋しさに、少しばかりおもむきを添へようと、義弟と一緒に築いたものである。絶えず眼の痛みにおそはれてゐる私は、部厚な繻帯を顔に巻きかさねて、痛みをこらえながら、土盛りをしたり、柴を張ったりしたのであった。不自由な自分には、このやうな仕事は無理だなど思ひながらも、生来、庭いぢりが好きなのと、草々の深い緑のほひ、やはらかな土のしめり香などに誘ひ込まれて、いつか眼の痛みも忘れてしまつてゐる自分が気がつくのである。夜、床についてから、あれこれと庭の設計をする。あそこには何を植え、入口はこのやうにしたら、などと考へ始めると、もう凝り性の私には、眠られぬ夜になつてしまふ。翌朝、夜の明けのを待つて庭に飛出し、昨夜の設計に従つて、こつこつと庭の装幀に取掛る。これは私の最も楽しいものゝ一つである。

しかし、時折、私は庭づくりの手をやすめて考へることがある。亡くなつた北條君はこれに類したことは凡そ手出さぬ男であつた。私はかつて彼のそのやうな姿を見たことがなかつた。そういへばBもやらない、CもDも嫌ひのやうである。現在の友の誰彼にせよ、彼等は、私がこつこつとその第一義的な、創作や讀書や思索に耽つてゐる。それなのに私はこれで良かったのだろうか、と。

しかし、それがたとへどのやうな生活態度にせよ、不斷に娛しむことが出来たらそれで充分である。喜びに大小はあつてもその本質には何の變りもないであらう。さう思つては、また小さな庭師になり、花と土にたはむれてゐる自分である。

小堤に包まれた庭には、ほどよい自然木の間に、恰好な築山がある。私はこれを男体山と称んでゐる。故郷の山になぞらへて作つたからだ、築山に添へて、粗末な禽舎と、小さな花圃がある。花圃にはグラチオラスが一寸ほどに芽ぶき、築山には枯れかかつた小松と、北條君の形見の沈丁花が、緑の色褪せた幾枚かの固い葉をつけて、頂きを占めてゐる。禽

舎には白文鳥がつがひで棲んで居り、雌はいま卵を抱いてゐる。雄はその雌の態度が、氣に掛るやうな、掛らぬやうな、ひどく手持無沙汰の態に見える。これが私のところの庭の全風物である。

しかし、これらの貧しい眺めも、私には恒にまあたらしく愉しい景觀なのだ。それら物自體の匂ひや、色や、形やは、それらの醸し出す気分と相俟つて、不思議なほど、私の五官に妖しい働きを示すのである。殊に、その色彩が添へるところの趣旨と味はひとには、また格別なものがある。色そのものを美學的に云々することは私には出來さうにもないが、色の持つ本質的な美しき、と云つた風なものを、最近、私は眼を悪くしてからいつそうしみじみ感じるやうになつた。おぼろげな視野のなかに入つて來る、平凡な木の肌の色、名もない一茎の草の色、一握の芥のはなつ地味な色、水の色、空の色土の色を、私は心しみにみ美しいと思ふ。いつまで娛しんでも足りぬ思ひだ有難いと思ふ。この私の氣持には、あ、まだ物の色が判る、といふ眼病者のみの持つ一種の、喜びから來るものも手つだつてゐるようがしかし、決してそればかりではない。

色彩の有難さを、人は案外忘れがちなのではあるまいか。若し、距離といふものが無かつたら、風景はあり得ない、とアランは云つてゐるが、色彩がなくても、風景は存在しないであらう。われわれは色彩を創造した榊に感謝すべきだ。

庭の一隅にルルドの洞窟をつくつては、といふ義弟の言葉に、それは良からう、と私もすぐに賛意を表し、早速、その材料を揃へることにした。小さな庭の事であるし、それに怪しげな庭師の腕を以てしては、到底、大がかりなものとは出來ないに定つてゐるが、手を染める前に、まづその材料調達に困惑した。私は、ふと、復生病院で見たルルドの洞窟を思ひ出した。それは二間程の高さの岩窟の内部に、等身大の見事なクリストの立像が、いかにも嚴かに生彩をはなつてゐた。それに較べると、いま私の脳裡に描かれてゐるわれわれのルルドは、余りに貧しくさゝやかである。私は義弟と相談した結果、岩窟はそのほんの内部だけを石でつくり、その周囲を四五尺の高さに土と柴で築くことにした。それで洞窟は一應出来ることになつたが、扱て、困つたのはクリストの御像である。肝心の像がなくては物にならんし、といつてわれわれの力ではどうにも出來さうがない。

ひと思案の後、御像はK神父から戴いた八寸程の十字架を以て充てることにした。これは茶褐色の台に、銀製のクリストの裸像が、かつてのゴルゴダのイエスのごとく釘付にされてゐる。

柴は直ぐ前の山に在るし、石も手頃の物が三個ほど附近の草むらの中から見付け出した。何かの土台物に使用したらしく、半面にところどころセメントが附着してみる。私はころみにその一つを持上げてみた。七八貫もあらうか、ずつしりとかかなりの重さである。私はその重量の裡にふっと幼い頃の事を思った。それはまだ六七才頃の事であつたやうに記憶する。どんな小さな石にも、石自体の生命があつて、石は生きてゐるのだといふことを信じてゐた。従つて、石は絶えず成長してゐるといふことも信じてゐた。河原などに遊んで、ふと小石を手にしたりとすると、こんな小つぽけな石ころでも、やがて自分が年を取つて、お爺さんになる頃には、この石も苔むしたお爺さん石になるんだな、などと考へる、すると、急にてのひらの小石がむくむくと動き出すやうに思はれて、ひどく気味わるがつたりしたもりである。門柱に鏤めた玉石や、或ひは土台石などの類ひを見てもこれがやがて大きくなつて、門柱からぬけ落ちたり、家をひっくり返すやうになるかも知れない、と途方もないことを考へたものだ。石に對するこの考へは、小學校を卒へる頃まで、私の脳裡に棲んでゐた。今でも何かのはづみに當時の事をふつと思ひ出したりする。私には楽しい思ひ出の一つだ。

この生きてゐる石をうまく利用して、恰好なルルドの洞窟をつくる喜びを前に、私はまた眠られぬ夜の中で、小さな庭師の頭脳を動員して、その設計をせねばならない。(五月五日)